

# おとうふ日和

おとうふは、どんな薬よりも勝るもの。

そのままよし、煮てもよし、焼いてもよし。本物の食はすぐそこにありました。

こんにちは。株式会社手造り屋 社長の岩崎勉です。

3月11日 東北関東沖地震により、お亡くになられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

3月11日には事務所に帰ってきて、すぐ揺れが始まりだんだん酷くなるので、マイクでスイッチなどすぐに切って外に出て下さい、と言っていました。幸い工場は何もなく過ぎもう1カ月経ちます。まだまだ余震もおさまらず、原子力発電所の放射能汚染度レベル7と発表され、最悪から抜けられない状態です。おちつかない4月です。

今月は生まれたところ、今住んでいる町、お店、工場のある町を、紹介したいと思います。

桶川宿は中山道69次のうち、江戸・日本橋から数えて6番目の宿場として、江戸時代の寛永12年(1635年)に設置。桶川は紅花やさつまいもなど農産物の集散地そして宿場町として栄え、特に紅花は幕末になると山形の(最上紅花)について全国で2番目の生産量を誇ったといわれ、あちこちで紅花畑が見られたそうです。

桶川における紅花の生産は、天明・寛政年間(1781~1801)に始まり、全国に知られるようになり、山形の最上地方では7月に収穫するのにたいし、桶川では6月に収穫できたことから「早場もの」とよばれ歓迎されたそうです。江戸時代後半には江戸、大阪だけでなく地方にも発展し、町人を中心に活発になった時代です。

紅花は化粧品(口紅)や染料の原料としてその需要が急速にたかまり、当時の価格は米1反あたり平均2両だったのに対し、紅花はその倍の4両で、幕末には「最上紅花」を上回る相場取引されたそうです。

桶川は、当初わずか58軒に過ぎなかった家数が紅花等の染料の集散地となった天保14年(1843)頃には347軒にたっし繁栄をみせた。

明治期に入ると中国産の紅花の輸入や化学染料の普及から次第に衰退の道をたどる。今は寿2丁目の稲荷神社にある、紅花商人が寄贈した石灯籠にしか見ることが出来ない。

意外なところからべに花の復活が始まる。大正、昭和、平成と100年を経て文化的繁栄をもたらす運動が始まり、2000年には明治後期の桶川地方の伝統的な建築様式を今に伝える

「桶川市べに花ふるさと館」がオープンし、「べに花うどん」「べに花まんじゅう」など名物になる。

『手づくりやさん』でも最初からお世話になり湯豆腐、奴など食べられますので、手打ちうどん、そばなどと一緒に 味わってみてください。

